

【 復活のトロパリ 第2調 】

し せ ぎ る い の ち よ 、 な ん ぢ し に く だ り し
 死 生 命 爾 死 降

と き 、 か み の せ い の ひ か り に て ぢ ご
 時 神 性 光 地 獄

く を こ ろ せ り 。 し せ し も の を ち か よ
 殺 死 者 地 下

り ふ く か つ せ し め し と き 、 て ん ぐ ん み な
 復 活 時 天 軍 皆

よ び て い え り 、 い の ち を た も う し ゆ
 呼 日 生 命 賜 主

ハ リ ス ト ス わ が か み よ 、 こ う え い は な ん ぢ に
 吾 神 光 榮 爾

き 歸 す 。

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】

し と と ひ と し く ど う ざ な る も の 、 ち ゆ う
 使 徒 等 同 座 者 忠

じ つ に し て し ん ち な る ハ リ ス ト ス の え き し ゃ 、 せ い
 實 神 智 役 者 聖

な る し ん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハ リ ス ト ス の あ い
 神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う
 満 器 我 國 光

しよ うしゃ 、 あしとしゆきょうせいニコライ
照 者 亜使徒主教 聖

よ 、 なんぢのぼくぐんのため、および
爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
全世界 爲 生命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
三者 祈 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこ と せいしんにき
光 榮 父 子 聖 神 歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
成 聖 者 亜使徒 聖 我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことな し、かれらにか
 屬 神 子 爲 彼 等 神
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩 寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たま え、けだしわれらそのしよしはなん
 給 え 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世 に、ア ミ ン。
 ぜんのうのきゆうせいしゅよ、なんぢはかよりふ
 全 能 救 世 主 爾 墓 復
 くかつせしに、ぢごくはきせきをみて
 活 し に、地 獄 は 奇 蹟 を 見
 おののき、ししゃはお起き、ぞうぶ
 慄 き、死 者 起 き、造 物
 つはみてなんぢとともによろこび、アダムは
 見 爾 と 偕 喜 び、ア ダ ム は

ともにたのしみ、わがきゆうせいしゅ
共 樂 我 救 世 主
よ、せかいはつねになんちをほめうと
世 界 常 爾 讚 歌
う。

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、 せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、
 聖 神 聖 勇 毅

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せい しん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う
 聖 神 聖 勇

き 毅、 せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を
 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第2調 】

司祭) ^{つつし き} 慎みて聽くべし、^{しゅうじん へいあん} 衆人に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しゅ わ ちから わ うた かれ わ すくい} プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち から、 わ が う た な り、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と な れ り。
救

誦經) ^{しゅ きび われ ばつ われ し わた} 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、

しゅ は わ が ち から、 わ が う た な り、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と な れ り。
救

誦經) ^{しゅ わ ちから わ うた} 主は、我が力、我が歌なり、

か れ は わ が す く い と な れ り。
彼 我 が す く い と な れ り。
救

【 アポストロス 使徒經 194端 コリント後書 11章31節~12章9節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ こうしょ よみ} 聖使徒パウエルがコリント人に達する後書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい かみ われら しゅ ちち よよ しゅくさん もの わ いつわ} 兄弟よ、神、我等の主イイススハリストスの父、世に祝讃せらるる者は、我が誑

らざるを知る。ダマスクに於て、アレタ王の邑 宰 我を執えんと欲して、ダマスクの邑を守
 れり、我 筐を以て牖より墻に 循い、継り下されて、彼の手を脱れたり。誇ることは我が
 爲に益する 所なし、蓋 我主の顯現と默示とに及ばん。我ハリストスに在る一人を知
 る、此の人は十四年前に、(肉體に在りてか、知らず、肉體の外に在りてか、知らず、神
 之を知る、)第三重の天に擧げられたり。我此の人に於て、其(肉體に在りてか、肉體
 の外に在りてか、知らず、神之を知る、)樂園に上げられて、道い難き言、人の語る能わ
 ざる者を聞きしを知る。我此くの若き人を以て誇らん、己を以て誇らず、或は私の弱
 きを誇らんのみ。我若し誇らんと欲せば、無智なる者と爲らず、蓋 眞を言わん、然れど
 も我自ら戒む、恐らくは人、我に見る所、或は我に聞く所に過ぎて、我を擬ら
 ん。默示の至大なるに因りて我が高ぶらざらん爲に、一の棘は我が肉體に與えられたり、
 即 サタナの使なり、我を撃たん爲、我が高ぶらざらん爲なり。我三次主に之を我よ
 り離さんことを求めたり。然れども主は我に謂えり、私の恩寵は爾に足れり、蓋 我
 の能は弱き中に行わる。故に我寧 甘んじて我が弱きを誇らん、ハリストスの能の
 我の内に寓らん爲なり。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、永遠にほむべき、主イエス・キリストの父なる神は、わたしが偽りを
 言っていないことを、ご存じである。ダマスコでアレタ王の代官が、わたしを捕えるためにダマス
 コ人の町を監視したことがあったが、その時わたしは窓から町の城壁づたいに、かごでつり降ろさ
 れて、彼の手からのがれた。わたしは誇らざるを得ないので、無益ではあろうが、主のまぼろしと
 啓示とについて語ろう。わたしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第
 三の天にまで引き上げられた——それが、からだのままであったか、わたしは知らない。からだを
 離れてであったか、それも知らない。神がご存じである。この人が——それが、からだのままであ
 ったか、からだを離れてであったか、わたしは知らない。神がご存じである——パラダイスに引き
 上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っ
 ている。わたしはこういう人について誇ろう。しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外に
 は誇ることをすまい。もっとも、わたしが誇ろうとすれば、ほんとうの事を言うのだから、愚か者
 にはならないだろう。しかし、それはさし控えよう。わたしがすぐれた啓示を受けているので、わ
 たしについて見たり聞いたりしている以上に、人に買いかぶられるかも知れないから。そこで、高
 慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、
 わたしを打つサタナの使なのである。このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さるよう
 と、三度も主に祈った。ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わ
 たしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、む

しろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。

【 アリルイヤ 主日第2調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、
ア リル イ ヤ。

誦經) ^{ねが しゅ うれい ひ おい なんぢ き} 願わくは主は憂の日に於て爾に聴き、^{かみ な なんぢ ふせ まも} イアコフの神の名は爾を扞ぎ衛らん、

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、
ア リル イ ヤ。

誦經) ^{しゅ おう すく またわれら なんぢ よ とき われら き たま} 主よ、王を救え、又我等が爾に呼ばん時、我等に聴き給え、

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、
ア リル イ ヤ。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思

^{ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ} を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 83 端 16 章 19～31 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、富める人あり、紫袍と細布と

を衣、日日奢り樂めり。亦貧しき者ラザリと名づくるあり、全身腫物を病みて、富める人

の門に臥し、其食卓より遺つる屑を以て、腹を果たさんと欲せり、犬も來りて、其腫

物を舐れり。貧しき者死して、天使等に因りてアヴラアムの懷に送られ、富める者も死

して葬られたり。地獄の苦の中に在りて、彼其目を擧げて、遙にアヴラアム及び其

懷に在るラザリを見たり。乃呼びて曰えり、父アヴラアムよ、我を憐み、ラザリを遣

して、其指の尖を水に蘸して、我が舌を涼さしめよ、蓋我此の燄の中に苦む。然

れどもアヴラアム曰えり、子よ、爾は存命の時爾の善を受け、ラザリは同じく其惡を

受けたりしを憶え、今彼は此に慰み、爾は苦む。第此のみならず、爾等と我等と

の間に巨なる淵は限り、故に此より爾等に涉らんと欲する者は能わず、彼より

も我等に渉るを得ず。彼曰えり、然らば父よ、請う、ラザリを我が父の家に遣せ、蓋我

にごん きょうだい かれ そのまえ しょう な かれら こ くるしみ ところ きた
 に五人の兄弟あり、彼をして其前に證を爲さしめよ、彼等も此の苦の處に來ら
 ざらん爲なり。アヴラアム之に謂う、彼等にモイセイ及び預言者あり、之に聽くべし。彼曰
 えり、否、父アヴラアムよ、然れども若し死の中より彼等に往く者あらば、彼等悔改せん。
 アヴラアム曰えり、若しモイセイ及び預言者に聽かずば、縦い死より復活する者ありとも信
 ぜざらん。

(比較用 口語訳) ある金持がいた。彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮していた。ところ
 が、ラザロという貧乏人が全身でき物でおおわれて、この金持の玄関の前にすわり、その食卓か
 ら落ちるもので飢えをしのごうと望んでいた。その上、犬がきて彼のでき物をなめていた。この貧
 乏人がついに死に、御使たちに連れられてアブラハムのふところに送られた。金持も死んで葬られ
 た。そして黄泉にいて苦しみながら、目をあげると、アブラハムとそのふところにいるラザロとが、
 はるかに見えた。そこで声をあげて言った、『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。
 ラザロをおつかわしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください。わたし
 はこの火炎の中で苦しみもだえています』。アブラハムが言った、『子よ、思い出すがよい。あな
 たは生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受けた。しかし今ここでは、彼は慰められ、あ
 なたは苦しみもだえている。そればかりか、わたしたちとあなたがたの間には大きな淵が
 おいて、こちらからあなたがたの方へ渡ろうと思ってもできないし、そちらからわたしたちの方へ
 越えて来ることもできない』。そこで金持が言った、『父よ、ではお願いします。わたしの父の家
 へラザロをつかわしてください。わたしに五人の兄弟がいますので、こんな苦しい所へ来るこ
 とがないように、彼らに警告していただきたいのです』。アブラハムは言った、『彼らにはモーセと預
 言者とがある。それに聞くがよかろう』。金持が言った、『いえいえ、父アブラハムよ、もし死人
 の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら、彼らは悔い改めるでしょう』。アブラ
 ハムは言った、『もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえって
 くる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう』」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※ 聖体礼儀③ (金ロイオアン) へ